北越奇談

ル 4
4231
2

4231
2

早稲田大學図書館
昭30.1.18
藏書

北越奇談 巻之二

北越 崑崙橘茂世述
東都 柳亭種彦校合

七奇辨

後越に古より七不思議といふあり今尚諸方の旅客好事の人此国に来る毎に其奇を探んとす故に其説紛々として実事を失ふ近世諸家の記行に載る所各々異同あり論説まちまちなれども是必凡庶の客民間或は伝聞に就て問訊するのみ故に或は誤り来りしものも可惜民間愚蒙の輩却て生

四の盲を突くとつくべし凡諸家の雑記記行にめぐる所と
玉人家々に論説する所を合せるに今尚二十有四奇あり
神楽嶽の神乐　海鳴　胴鳴　燃土　七ツ法師八ツ滝
白兎　鎌鼬　火井　塩井　燃水　蓑虫の火
冬雷　逆竹　風穴　沸壺　白螺　土用清水
四蓋波　箭根石　三度栗　無縫塔　沖の題目
八房梅　即身仏　是なり予密に按ずるに日本書紀
の二説と幸とこゝに亨徳の比予が四好事の者偶此七奇を撰
せしなるべし尤其時世は義政将軍の比にして風流好奇今
時の春予に等けきものなんぞ何を以て此四の勝予

となり諸家の記録にも載せ公聽にも入れば今更止べき
にあらずや此説今古の別なくこゝに古人つもぐ諸四の奇の名
勝穿鑿のあるべきを所と好事の者も又少きがゆえに目前
の説のごとくに他邦の論にくらべて今人太平永く續き土
地名恩よりて民は耕作に富み常に間暇きに乘じ四方に
遊歩して勝を探り奇を探り家にみてゝ山林を穿げ石を穿
水脈を通じ田野を開き深山幽谷海島河源にあるまで人
力の及ぶ面ざまなる故に天の化も又盛にして五月十日乃風
あるゝ時を不遠草木生じ百穀実り独四は却て涼しく宝四
は天に暖なり於此諸州の産物奇勝其類多あるべき多し

見をもく見をもれば古の七奇今尚他邦に用ゆきもあるを予が国民間の奇蒙他の問訊に対し見非かの七奇を かざりんと欲るゆく見を減ず彼を増して終に式笑べき の志きなり予愛に於く古の七奇を撰ず今の七奇を撰 せんとて希くは四方の好事家惜之説論せよ

古の七奇

燃土　燃水　白鬼　海鳴　胴鳴　火井

無縫塔

其一　燃土　焚土なり米山の陽西北の浜深町のわとり粉の池朝日の池同柿湾の裏田の沼より出る又三島郡伝森と云

呼用水の溜池及田の沼より出づ其外所々に見る諸の桑田江海の変上古洲根木業作く落かさなりく数千年をつて泥土のどくなりくるおとし見を田家の人切あげく日に干焚くるに即ちく燃る今尚信州にも出西国にもありとゆ然きど日本書紀に人皇三十九代天智帝七年戊辰五月越国進水土可代薪油者とあり上古已に予が国より此一奇を出すを明なり今年文化庚午まぐ千百四十三年にあたり

其二　燃水草生津の油即臭水の油なり頸城郡凡六ヶ所然れどもその大なるあゝ浦原郡草生津村同新津村同柄国

本村川黒川飯村ホなり出き陰の上蛇崖と云ふ所海中に生ず
此所ハ水中より油まじりて沸出る或茶に染て付るこゝ
然れどもいろなる油なるゝ或ハ水の臭きゞゆへに色水の
油と称ず張華ぶ博物志石泉脂石漆李時珍が本艸に石
脳油又石油山油西陽雑記に石脂水と云る皆此類ナ
今此邦の醫是を石脳油に書用るに甚効ありと云フ手
是を按ずるに是れも又焚土のごゝく数十年前松柏の古木
大材土中に落入さる松脂の腐水と却て其故ハ表油煙多く
松の臭ひあり　或ハ云松脂ハ茯苓と成り琥珀となる何ぞ油と成るの理あらん
是ハ只土中の油なるゝと云ふ松脂を樹より自然に出ずり
落土中に凝堅るるの化して茯苓琥珀ともなるべし是れハ土中に久しくふる松脂
に成ゝ水ヒのそまりて腐爛せるあるべし只土中自然のあらゝいなる

暗愚の説と云ふべし　殊に上古北越ハいまなる山谷水土の変ありしなる所
水底沼田の下多く坏木の大なるものを出すとぞ有がゝ
近比糸魚湖水の底樋ありぬきの所数丈の土中より出る本の
ちくなる坏木数十を出すをもて知り行き其奇可察此二等即
可代薪油のなり
其三　白兎ハ諸州共に是あり乃ち他邦の白兎ハ即ち
貢に成ゝ生ずるより白く冬夏ともに白ず冬ハ
常なりと雖四に産する所ハ夏の赤より秋の終りまゝくハおく
く灰色に成ゝ白ハ始ゝ冬ハ即ち白に雪の凝まるがごと
夏秋も尚まだらなるあるべふ是ハ安永年中古志郡の

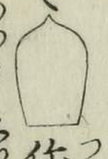
うちより黒頭の白鬼を出せりとあり近世にもくに奥羽
又信州加賀越中佐州などにも白鬼予が國のぼとゝす
然れども年代実記に寶亀五甲寅従越國獻白鬼と
あり此國他邦に先ぶるく奇とゝ称するとゝ或は今
なほ諸州に類生るとゝ雖書明なる証以他邦の
産ハおく越國の余流といへべし

其四　海嘯天とゝ雖なるとゝ已はあ
潮の音五六里に聞へるく南にあり風雨の日嘯ん
ともするとゝ北は少見をもつく國人陰嘯或白衣九州灘
見と類する所ありといへ然れども予が國此音先生て
此より今好事の者九州灘の中に少出せりと見る予見を按
するに数十里の海波大山の崩むとあるは必ず海の震動さ也
流るゝあるゝぞ知なるべし然れども陰
嘯に其音自然と南北なるゝ北越の海に張るといへり此
以奇となるゝ唯享徳年間の旧記に此奇をあげる或
其五　胴嘯秋嘯の日風なるゝとき必見をきく
たゝへ中より雷の裏き落るごく雪の高山なれ落
るごゝきあり雪ありてつゝとも定めがゝ頸城郡に黒姫嶽と
こ蒲原古志の名にこ薙門山陰ケ嶽ともいへ又岩船郡に
村上外道山ともいへり其答文に遠近ゝ俗の談にむ已奥州

阿部の族徒黒谷兵衛と云る者あり八幡太郎義家の為に討き其頭と胴と西所〻に埋む（今蒲原郡渡部の辺黒谷村八幡の社あり其下時〻震動して伝説を談）然るに其胴を頭と合せんと欲し〻に伝説動をなせりと云伝へ一矢もゞ〻今に伝奇稀に世に有り只〻黒谷の村二三里の間八今なを伝説動あり〻其方角まがゞゞも在ぞ黒谷八幡の社地なりと云り又黒谷村の人八前〻より其に伝る動を世と〻他に生る〻〻〻即世見又一奇なり予近比西寅の秋某山より西北の海辺に〻〻世に海潮の著地に接し〻伝動伝説なるもゞ〻見を以按ずるに頸城郡の海八能登の北涯をゞ〻佐州の南浦と云る〻〻〻大洋数千里の海潮茲に的る所なれば伝著をなすと雖ども即数千里の外風雨気ざ〻ゆらるゞ〻其気海上を走り〻地に微接する所即其気地を押し山谷に徹して動を凡気をもつて〻気伝製と云る〻〻伝説に〻〻〻かに風〻〻人ともる〻〻〻窓戸先ッ鳴る而〻〻人ともる時〻燥自然に落ちかゝり〻気響し魚ぞり猫児ひとり和〻見自然に〻〻〻凡気先ッ押るものなりされば晴天波風ちゞる〻〻〻るわれも浦〻胴鳴る〻〻〻必風雨あり胴鳴と云る〻胴に著〻鳴る〻〻に石打〻〻〻人伝説をもつて〻〻擦られど銭後に〻〻〻凡れ〻〻他邦にまゞ穿鑿の〻〻ざる所只〻

地勢にしるう黒色の一奇う

其六　無縫塔人蒲原郡河内谷陽谷寺門外溪流数十段の渕間りく百歩ばかりの間岸平らに乱石磊落しり古寺住僧入寂三年の前必ず渕より墓所の下とかせる石一方岸の上にめぐるまりて石巷群の石に異なるにすめ〳〵ねと良基と〳〵茶徒の人拾いとりく見とて無縫塔なりと衆目ろさて呼皆一なり其奇怪いなるもの是がたし一下しび衆人の名付るより古石我夜渕に抛入まども一夜にしてまたりもの呼よめげとく〳〵なり先年住職の和尚其石沈渕に投れ入く曰我大願のいまご死とべく〳〵〳〵其場より寺と生て再び陽〳〵さりに命つがく長寿なりしといり其奇医予ず呼にいりて寺の墳墓をるに己に其石十四五並べり余人常の無縫塔人作り信州四部の温泉寺ず奇とおいしく人作りと予いまご甚だ知る人にしらしく世に水底より無縫塔の形を



作りるとくめぐるといの表いづれ追て考べし只ず古一奇へ怪といべきのこ

其七　火井三条の南一里ばかり山の蘇入方村即入方寺村なり又妙法寺又如法寺とも又某〳〵百姓の家炉の角に石臼をふき其穴に竹をさし火をかぶせば即声あり〳〵火いりり盛に燃ること尺ばかり〳〵〳〵縦横に竹をくめばまた竹の孔ごと皆火ありる竹を

八方村
火井乃
図

少〻らあぐれば央ハ火絶くなく上にぐり火さんなり皆土中
より登れる気のもゆるなるべし一説に硫黄の気とゝ
笠硫黄ハ即火遠ハ土中に入〻地中も又燃なり是ハ必臭水油
の気なるべし凡國中是ゝ類もの所おゝ柄目木村郎入方
村に見ぐ寺泊大和田山の間少〻の水溜りあり〻冷水なれども
常ゝ湯の沸くらゝく泡立くあり是に火をかざせば忽燃る
そのゝ枋尾の郷比礼とゝ所山沢の水に火氏をせば水上に火
燃る魚沼郡一ノ宮村山間の澗流に火をゝらせば三尺ばかりゝ
〻く火もゆる古志郡見附川舟渡ある所川原の砂に笹城
さゝ火をかざせば幾所も燃〻く不絶夜行に使り其余所〻

に多〻頸城郡上野尾の赤谷間より用の生る洞ありく火を絶
もゝゝハ忽空宙に火燃ると也車輪又門郡吉村大滝氏の家
井と掘〻に烟草の空がらより火ゝゝり井中まく燃上りて故に
きゝゝぞゝぞ奇なり水戸赤水先生此一奇氏ゝゝ玄学ぞ
即琅耶代醉に火井の説をあぐ又大明一統志にも蜀地雲
南に有火井不過二三所とあり只〻赤水の奥羽記行に即
身仏逆行八房梅ホと七奇に挙げ〻紙人是ホの白癩と奇
とゝつるも所以天とそ〻仏りまぐ誤まるなるべし赤水偶氏四
〻り農夫商客ホの説を少〻北越に人ゝるべくなるべ
なるべ〻何ぞ再び知者ゝり〻ゝ赤水乃情識

いへ浅こしき説といへべし又此火井を賞し〻是陰火にあらず
陽火にあ〻ずといふ是又誤まり硫黄の火を以是にうつせ
ハ即燃る是陽火にあ〻ずして何ぞや陰火ハ陽火にあ〻ハ
忽消るあなり

右ハ古の七奇なり

俗説十有七奇

其一　神楽嶽のかぐらといふる山下人無まなく時あて
山上忽御神楽を奏する音世世ゆゑ〻ふ其所名地
なるべし中越ハ越ハ羽州の境村上山中と又
下越ハ越ハ是を分しべ今陸ざうひは川の名とも〻ふ

年其地をとりもれども未決あるまできとにあ〻ねど考
て穿鑿を歴〻其実を記もべし或人是を少〻うるゑど云と
牧笛撫歌なんどのやまりけんつぶろ

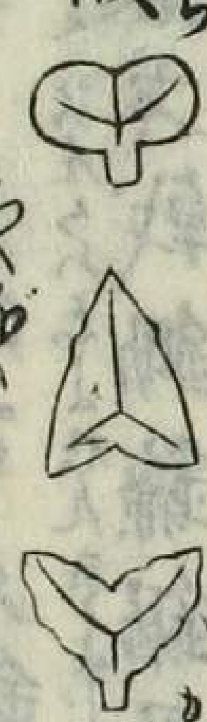
其二　箭ノ根石　石鏃なり　諸方の好事家己に奇を知
秘神〻あり〻上品なるハ紫白青黒皆玉を以ごとくに
して込なるべ大なるハ八寸ばかりなるあり二寸三寸四寸ある
あり又稀なり多くハ一寸ばかりあり雷斧石をまたまぐいごと
古き社地古塚跡畑などにあり雷斧に似〻ハ形異〻頸城
又俗に天狗のメヒガイといふ物を生を石鏃に似〻ハ形異〻頸城
郡に〻大光寺村山畑神田山三番郡に〻ハ番沢の北京ヶ入村

渡辺村老者ヶ岡竹森の村古き社地あり雪中に出のうちより
赤放て行末に鑿ヲとあり已浦系統より伊夜日子山下禁村の
畑黒滝の古城跡ホあり又茶山の西北土底村海辺砂山の間に小
池あり此所ホ三ヶ日く小児ホを辺おく拾ひつしてはと人ども
ほ之形又元のごと予一ヶ所此地にあそび其奇を試んとおひ
一ヶ小児ホと伴ひあの地より五六丁にして此のわとりにいたり
石鏃五ヶ六ヶ拾ひ得ぬ赤服に又独行してその
所にあり出るにさして三ヶ四ヶあり其中不思議ヲの小半鏃
の形をなしいまだ全くなるざるあり又水底所々より石
鏃一ヶとして皆一片くに割ヶ花さるごとしまたに

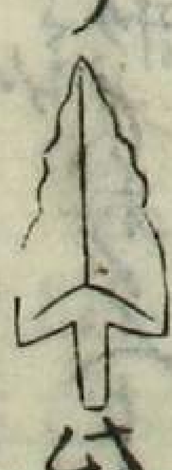
予此奇を人々に身毛を慄然なせり又ほを社地あるに此中
より赤放て人にあたれるもあれど散々損傷にあらずまた又信州
境関山の中にて農家の婦戸外に出て浴場しけるに山中
より人ともなく矢箭て盟の中に花八ヶ女おどろき之
上ヶ見をこれば大なる箭の根石ヶ七寸半なるあり
誠に其奇なるべしと徳ヶ北斗山下の田家に二月十五日
十八日山神祭とて山に不入ヶ誤て山にいるに必神ヶの
怪をなす病ヶ今に所々拾ひつくるとども尚ほねホるど
に不絶ヶ邑續日本紀日本後紀兼和六年出羽国より アス
八月廿九日田河郡の西浜符て達る舟五十余里の間元より

石ふるし去ル十三日より雷雨甚しく十余日然歴晴天をみる
後落る石少からず鏃に似鉾に似たる石或白或赤とあり又三
代実録に仁和元年六月廿一日出羽国秋田城及飽海郡神宮
の西浜に石鏃を降して同二年出羽国飽海郡諸神社乃辺
に石鏃を降すとあり是を以て見れバ上古已に其神奇を記す今世
好事の者是ハ人作にして石と石と然打合せ割たるもの也
形をみるといへ近頃今津の医某なるもの専ら心がけ作り
よく予に見せて其形似よりたるにもあらず笑ふべき事也
紫土色俗に火打石といふるものとし予即其ハ去るる紫白蒼
色各や珠玉なるもの五六ホ然生して其をもしるに其医もて下めく

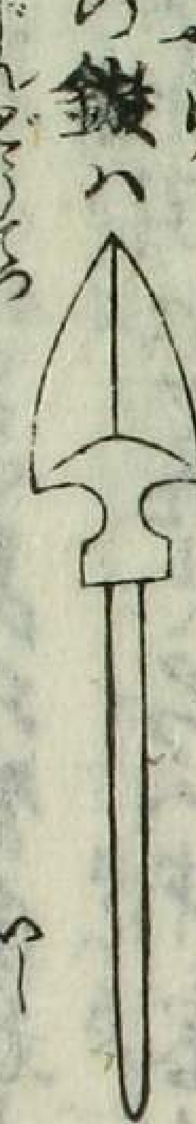
信服せり又江州石亭なるもの其人作する事然論ずして又或人
上古是を作りて竹木の先に挿し禽獣を獵せし是又論ざる
に足らざるの説なり　石鏃上品なるものよく竹木を削るべき
鑿なりといへども竹木に挿て弓にあげて用ひるものにあらず
と見ゆ其故ハ形



如此のもの多くあり



此
ホ最なりといへども竹木にさしこみ肉に深く入るべき理なし
真の鏃ハ



かくのごとき是をもつて知るべし
又古人銅鐵いまだなきゆゑ石と石と然打合せて獵せしものならん
に此物をなさば何で

如此不用の戯に力を労せん
や又上ホあるハ璞工のごとくなるものありて鐵槌にて砕きさき

あり又上古人作とつゝ北國にのこる所るいろ色又或人是を
自然にしてなるものといひ是荘子の見る何にもせよ物ぐ
智に及びがたきものゝ皆自然とこゝに云べきもなきまでに
物理を明にせんとこゝに才氣もなく先愚に近き連論といへ
べし是も自然になるものゝ鏃の形のごとに作るべしまた或
ハ鉾鎗鉄鉞刀劔戈戟鋤鎌鋸及ホ其余種々の形もあるべし
予是を按ずるに鬼神の説明らかなり只本草に石弩と云又
ハ武器の霹靂石〻〻楔〻〻礎雷斧皆武邦にあり是ハ
人作なるべし其石質皆蘇品なれば石石琢磨して形を
なせりと是もそのあるべき未に必せり霹靂石ハ自然に

其形も定りなく大小数百色玉のごとく石弩ハ弾石の内より
自然に片〻として割ぬべきなれば武邦石鏃の類にハあら
ざるべし雲母石石英の類又荊州梁州肅慎國等石を以て
矢に作るものあり是も予数年試るに其多くハ生る石
後来の石質蘇品なるべ石鏃も又蘇品なり石質明徹
なる所ハ石質も又珠玉のごとく其石色も又同じく其中蘇悪
の品ばかりたまくゝ是を以て〻〻へハ作るものゝ又ある人
遠石ト云ハ是なりと云て予其説を半ばこれを信ずハ曰
一儒者湖にあり石鏃をもつて来柏清人に示す清客是
て遠石なりとこゝ大笑せりとこゝ云て予をごいぶうきき説こ武人

根に伝倫をなせりとおぼゆ美くべきのまぼろしなりめの呉人
蓮石を包く玉となせるゝ豈其めるんや一説に蓮石ハ即
玉に似たる石なり伝邦陸奥玉に俱るの知ぬべ本州霹靂石
津軽石〻称るおのぐ〻多し
ハ伝邦の落星石俗に星鉾と云るもの見なり今北越信州
佐州千余所〻山中ハ空中ハ太陽の気鬱結〻忽火
光を發〻死去れる地上に落るゝハ即化〻石となるゝ
見なり其火光大なるゝハ俗に光りものと云
小なるゝハ流星又夜這星と云
即伝火光なり豈真の霹靂んや　霹靂石形不一玉書色黄
黑色漆黑白点ホなり　あぐ光彩潤沢明徹石玉俗に落星石
呼鉞石と云

霹靂堪　四品
俗に石鉞
雷の太鼓の撥〻云

長一尺六寸余

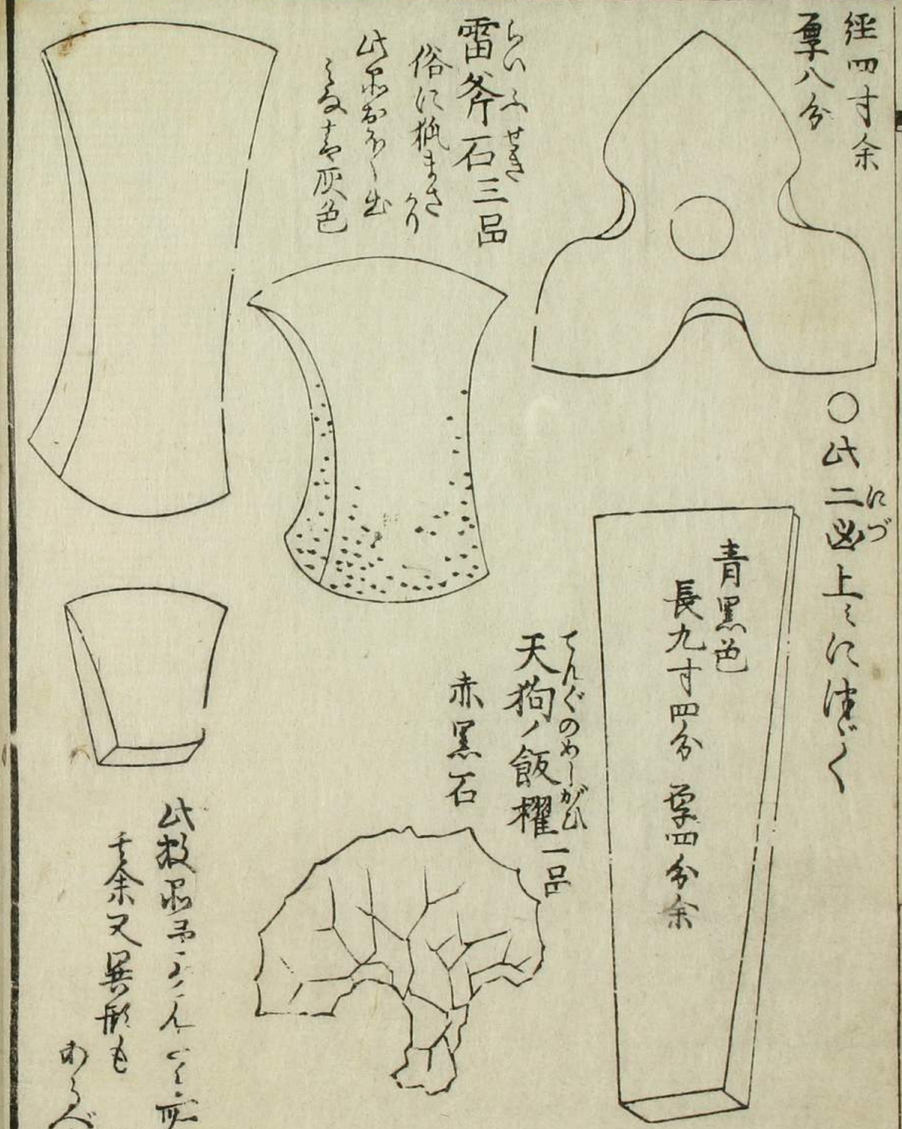
八寸

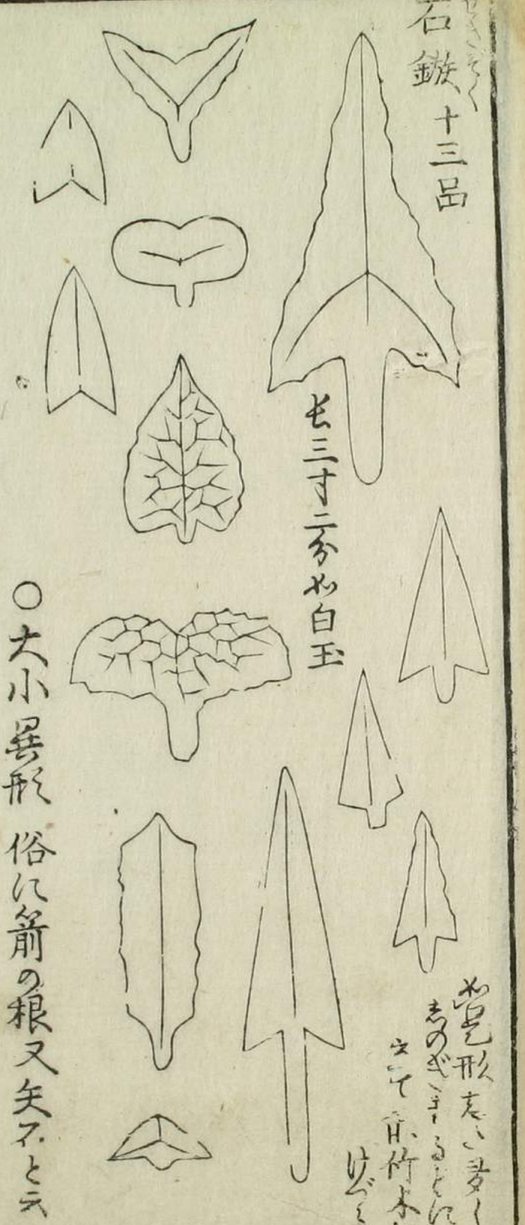
一尺五分

長一尺三寸余
四方五寸五分

霹靂楔　三品
俗に大勾玉
鬼の〻形〻

長八寸五分　両面
伝所ものぎの下自然〻薄く板の形のごと〻


径四寸余
厚八分
雷斧石三品
俗に雅まさり
仕ほかるべし
まなかの灰色
○仕二品上に次ぐ
青黑色
長九寸四分 厚四分余
天狗ノ飯櫂一品
赤黑石
仕数品ほこんて変りて
長余又異形も
あるべし


石鏃十三品
長三寸二分ゆ白玉
○大小異形 俗に箭の根又矢ゾと云
紫赤黑白黄斑色皆ゆ玉
黄玉色ハ多く産出す
右数品あるまるゆ仕諸方の風子よく見を知る只一仕一奇ハ
羽州をもつて祖とすべけれども今世北越仕奇多ゆゆへに他邦
より見を求むる者必予ゆ図をもつて名とす

或人の曰汝頻に鬼神を信じ婦女子のごゝ豈鬼神手足有てきの工をなすことゝあらんや予が曰鬼神又なきにあらざる場に遊魂変化なを是なり鬼神又手足あらゝ鍬をつゝり出すべ

あゝ上古戦場の死氣凝結して不散一念只鍬を磨て欲よ對せんとす其氣石鉄穿ゝ忽ち形をなすと前にもつるゝ

氣をもつゝ制するゝ能はつゝ六月雪をゝび三年

百ゝ〜ぶるの類匹夫の恨ぶ也ゝ戦死の遺恨をや

只其汝ち四の奇を爭ゝ予一人を屈するにあらざ汝ち

又自生四を辱むるなり於此因にいふ或人両三度語ゝ曰我

甞ゝ羽州男鹿嶋の中藤武の碑ありと然れば藤武ち四に

せるゝと明らかなり是一快事にあらざるやと予笑て曰公の聖人

の理をそんで中華を賞ぜるゝ尤もありなん何ぞ本邦とて

強く夷狄い四〜邑毛を快するなりとせば即公ホも又尤樸

不毛の辱しめを受るにあらざるや毛好奇の淫〜ゝべ〜又云

四字と云ども章を文ぶゝ予ホの及ばざるものゝ〜

西海の鰐龍子俗説辨をあらはして其中本邦の奇ゝ式

論ぜる所に〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ四何〜をもつゝ奇とする是

ぞ奇とするに足ゝん中華の書ゝ式かの四己にありと記

せるゝ数ケ条なり予密ゝに笑ふ是彼四を賞ゝ〜本邦を

辱しむるの文辭なり予是を論ぜば中華の書何〜をあげ

記るれども不珍ことを本邦已に奇あり即是なりと本邦
かの国に不減の賞を記しことなり又蟠龍子自言に
俗説雑を謗れる人ありとせけり法らくは其人に面しく
高論をせん是我形人所なりと記せり予近に俗説雑三三
編をよくこひらく其中時頼秀吉両公田園の論ありまれ
ども浜生り蟠龍子に二公の意を不察といへべしこの理は
不おの妙にしく言く何ぞ窮る所めんや予が石鏃の論
の後の好事家妙論あらんとぞまつ
鐔鞆一ち撞太刀時所に定り色是くに社地をるるに
不あに面部手足なんど皮肉割裂れて白くぶつかること

なりきづにの大小にかかりあれしこさて血と不出痛こまなく
何のけがとも又に名付がこまあり或説に鬼神の又に
ゆきあり其解る所に奇をあること故に撞太刀と云説
當作りしこべきに鬼神へ北方陰今の地にあつまるあに
しく即坤を鬼門しなすを依之北狄へ鬼神の奇をこ是
然れども天地の化長ず人気満てふ隨こく自然と幽冥に通
きるあと是ゆに奇北狄三五十前年までへこ多かりしが
今へ稀にるすなり伊夜日子より岡上山にかけ諭を所玉坂
とこへあり此所にあやまりこく瀆倒る者必に奇をこくやに
所にあり又一説に寒気皮膚の間に凝封せられこく嗟をなる

ゝゝ皮肉さけ其気度とゝり見医家の説なるべゝ尤も
べ甲信の二国奥白河の名ゝ極ゝ地高なる所にゝゝ寒気北
越に倍ゝ多ゝ代奇却ゝ多ゝ又其治方に古き暦
紙を焼ゝ貼れば即効あゝ見邪と去るの人ゝ只ゝ揉ひゝる及
解ゝくにゝあゝぞ見も鬼神の気にふるゝなるべゝ今ゝ他邦も
代奇稀にあゝゝゝ

其四　四蓋波　四海波　頸城郡名立の下鵜ヶ浦とゝる所打寄る
波立ゝゝ四方より四ゝに打とゝり見破石尤も峙ち絶
ゝる人に代紋をなせるゝゝ五六かいの波をゝゝ
散ゝ奇とゝるに見ゝぞ俗説高砂の謡ひを聞ゝ四海波とゝる

ゝ只目出度あとのゝ紋ゝ四海と四蓋の意を去ゝどゝ
蒙説をゝ出せるゝ他邦の人に對ゝゝ予竊に面赤も

其五　冬雷ハ北海氣候の逆ふゝゝ南方の国に異なるゝ
見ゝ正ゝぞ南国の柿ハ正月に用ゝ北国ハ三月にかゝる東南の
水仙ハ冬ゝゝ見を発ゝ予が国ハ未二月に漸く咲けり見皆
陰陽運速ゝかゝざるがゝ人なり

其六　三度栗ハ蒲原郡安田村にあり親鸞上人の植る所
とゝれ旧跡なり七奇の部にあゝゝぞ代稀類常州にもあゝと
ゝゝかゝる異木変艸稀にあるものゝ近年村に妻准寄上人
の植るゝ旧跡とのゝなゝべゝ

其七　沖の題目八角田渓海上にして日蓮上人の旧跡なり
波風靜なる日海上に張目の文字深く生ずと云ふ沖の松
の足つるの今に多くありと云ふまでも信じがたくて
たゞ白羽州宿が岡に梵字川あり其源湯殿山より生ず
流水の絶に梵字見るとつゞけ見ホのとゝ居民を孝く
とゝろのゝ奇とさるに見てゝ

其八　沸壺　熱壺ゝ　蒲原郡柄目木村　即池の巳ゝ十丁斗
隔てゝ山の尾上丘の引廻りとする所経四五尺の井あり其中水
自然にたぎ〳〵沸ゝとすると二三尺外に流ゝ呼もゝく文に塔減色
見へ就中之山南部怖山ホのどゝ即ち地中硫黄の気あらひ

臭水油の気泉脈を押しゝく武勇描をなとゝゝゝ先ゝ家
宇記に云咄泉の類なり

其九　塩井三島郡与板より西南山の中垣の入坂沢中に出ず
又杤尾の東山の谷垣中村溪流の中に井あり其村に見を
汲ゝ食用に當予ゝ井水を味ひゝに甚ゝ鹹ゝ俗見を
孤法大師の加持とゝ水戸赤水子前の火井を賞ゝく
田代奇ひとり浮屠子の眼に解ざるゝゝ幸ひなれとかゝる
俗説を飛る好説と称ゝべゝ　又享保十三戊申二月に魚沼郡
新保村庄屋半左衛庭隅の石の下より白垣状吹生ゝて日ゝ
に枝弁なりゝが一ヶ月ゝなりに自然に減ゝ枯ぬ見ホも

地脈の凝結せるもの代酔偏に木脈ホの説をあぐ他邦にも
姫井の奇ハ尋ぬるに多し然れども其中石脈ハ最奇なり

其十　逆竹新潟の上多屋村にあり是亀上人の回説にて
今ハ式竹皇幽遠なりむかしハ逆生の竹もありしと云今ハ
絶てなしと七奇にいへり

其十一　即身仏三面郡野積浜最上寺弘智法印の肉骨と
又津川郡玉泉寺淳海上人是も入寂の相今に不朽現無
赤水子是を説て其載言一矣に怪しう仏を学ん人ハ言下
を味へべし是ホの説なり七奇ハ民間の俗七奇を
不知率時他邦の客に向訊せられ是亦なりとひ生る説也

即答に使ひ来るものとおそれ

其十二　七ツ法師八ツ滝頭城郡高田の南雅波山にあり未の時
日西に旋ひ次第に滝白くなりて申の時よりあれば即滝
の中央黒く法師の形あり其色さゝに似て岩
ぶみ〳〵なれど是も西国新向の滝に不動尊の形あるとも
いへども遠近の峯に樹の蔭なるとお映じく其形をうつすなる
べし予今町八幡にて是を見る奇とするにハ見ざれども
景色ゑざよ〳〵又糸魚川の辺に牛形にて奇しき雪解の
跡黒く山畔に見る即大石あり残雪の中に先ず形をあらハす

其十三　八房梅蒲原郡小面村にあり即親鸞上人の回説

親鸞上人乃
旧跡八ッ房の
梅花図

なり　一坐蕃樹　今之式所くにあり　くくくいづれの説にもせよ俗に
五百年来の古木にして老根は虎屈し枝は竜蟠すること一根
八本に分れ天とさし地を掃く雅致いとべくしとも其花は紅八
重の大輪枝々坐を争ひて開き其清香芳然として数里
ふるへ寺遍く諸国の老梅を尋ねるといへども其奇樹是よ
對するものなし其實酸の気式ふくむなどいろ〳〵敢て論い
かんべと

其十四　風穴　風洞　三島郡雲上山四上寺洞陀堂の後絶壁の
下に径尺ばかりなる岩穴あり〳〵風を出すこと扇風のかに比す
べし俗説に角田渓の洞口にお通じく山奇とゆるとしいり官

凡伊夜日子山を隔て三里あまりなり此説へ入るに
ざれども又外に風のかりよりぎさとよ所ぶふ邑即記中原く
大空所あり〳〵自然に氣式発を穿るあり又地中泉脈乃
通ずる所ろ〳〵大山を穿て溪間に通じ〳〵又頭城郡波
山にも風洞ありと予未見水經に河水の南逕北屈縣西十里南
山山上有穴如輪風気蕭瑟之と即雲上山の風穴これ
かくのごと

其十五　蓑虫の火　虫の名に何生の所なも限りぞ細雨蕭條
たる夜蓑笠にひとり路をゆく者あるべ忽然として蓑の毛
に螢火のごとく光るもの付見えるひび忽蓑毛いちもんに

火うつるく笠の末より笠のぬれる所ずくおくく光燦然
とり落るる露皆火をとなり心をちづめ身を初せ
ぞろぞろとうつる又自然にきゑる蓑にもかぶりぞ傘衣服
ホおりぐ又船中湖水の中にもあり風枕の怪ゆゑんといふ
親の生ぐるを尤にあるぐ兵鬼火なり老子庵筆記に田
野麥苗稲穂雨夜忽火の記るる是古戦場の燐火
とおもうせりおりぐ

其十六　土用清水の古志郡長岡著倉木明神の山下中沢村
一名谷内村　田間小さき呼石のうちより清水出る年ゝ六月土用に
入前より水ぐづ出土用中に清水溢ぐ十八日を

歴ゝ次第に水減ぐ一説に小松内大臣平重盛の舎弟
池ノ中納言頼盛拾津一谷落城の後此国に来り蒲原郡三
条の城に入る此沢中沢村にあり水を求るに時六月の炎暑
あり無沢水即以杖地をさして得ると此説伏波将軍源
頼義の伝に似ゝ信ぐがたけども仏泉の奇異とぐ
其十七　白螺前に記る古志郡瀬門山上芦ケ平村馬返ケ
池にあり他邦の人ゝ見ゝ是をゝんと成ども村老敢く
ゆるさず今ゝ見ゝ是池神の祟り山呼に〳〵山大に荒
る沙なり六月雪をぐど風雨洪水あり故よおそれて推夫を
なす至ゝ今ゝ他邦の人に池を見せるとだゆるさず

いて予弱冠のころ四月廿四日此所にもく路式矢黄昏に吉ケ平に出宿式市ム翌日ようゝ風るとげしく亡日まぐ留宿せしが其中村老に伺ふ山中七池水おくゝんぶつせり白螺ハ田螺のちろきものなり

予今の七奇をろゝだんとするに古の七奇のうち捨べきものあり新に加へんと欲するものあり然べたゝ今他邦に奇を出さゝ又ごも奇なるものハ即奇なり又後の人時の宜きにしたがつ後の七奇を撰述しのゝべし

○新撰七奇

石鏃　鑄鼎

此二奇古の海嘯白鬼に易る　新撰海嘯ハ若に出べく

べゝど白鬼ハ近四金ものとなるべきゆゑ除く

火井　燃土　燃水

胴鳴　無縫塔

此五奇ハ古より賞称せるものとあるべし

右

北越奇談巻之二終